

式 辞

本日、静岡県立大学学部 512 名、短期大学部 136 名、大学院博士前期・後期 93 名の諸君が、卒業及び修了しました。卒業、修了された学生諸君、まことにめでとうございます。

あわせてこれまで学業を支えてくださった保護者、ご家族の皆様にも、お祝いを申し上げるとともに、ご苦労様でしたと感謝の気持ちをお伝えしたく思います。

本日は、知事をはじめとして、日頃、さまざまな側面から大学を支えてくださっている来賓の皆様にもご臨席賜りました。数々の厚いご支援に対して御礼申し上げます。本学教職員とともに、学業を成し遂げて羽ばたいていく卒業生諸君の門出を祝いたく存じます。

卒業される諸君、皆さんが学んできた期間は大きな社会変動の時代でした。2011 年には東北大震災、昨年には熊本地震が起きたことは、まだ記憶に新しいことです。日本人口の減少が国勢調査によって確認されたのもこの間のことです。大学も社会の変動と無縁ではられません。今後大学入学年齢の 18 歳人口が大きく減少していくという、大学、地域にとって困難な「2018 年問題」が目の前に迫っています。

時代の要請に合わせて短期大学部の看護学科を閉鎖し、看護学部の校舎を新たに小鹿キャンパスに移しました。短期大学部にこども学科を設置しました。2014 年から文部科学省補助金による「地(知)の拠点」、いわゆる COC 事業として、『ふじのくに「からだ・こころ・地域」の健康を担う人材育成拠点』と銘打った事業を開始しました。健康長寿を目指す県の人材育成を通して、地域貢献をすることを目指したのです。この事業に関連して、地元静岡について多面的な学んでもらいたいと、およそ 20 科目からなる「しずおか学」を選択必修科目として開講しています。皆さんの中にも、しずおか学の授業、ゼミの活動として、あるいはサークル活動として、県内各地でフィールドワークに参加した方も少なくないはずです。教職員、学生諸君が一丸になって地域活動に取り組んでいただいている姿に感謝しています。

私は 2 年前に学長に就任しましたが、地域における知の拠点として大学を発展させるべく、「地域をつくる、未来をつくる」をモットーとして掲げました。最近、人材のダムとして大学を位置づけて、若者を地域に定着させるのが大学の役割と期待する向きがあります。地方の大学にとって、確かにそれは重要な役割ではありますが、私は、卒業生を地域にとどめおくことだけが地域に果たすべき

大学の役割とは考えていません。むしろ広く世界に通用する技を身につけて、世界で活躍できる人材を養成すべき、と考えています。そのような人材こそが、地域に刺激と活力を与えてくれることを期待しているからです。企業誘致や学生の地元就職を増やすだけでは十分ではありません。「未来をつくる」ことは、これまでになかった新しい価値を生み出すこと、ひいては新しい文明を創造することに他ならないからです。

卒業後は、就職に、進学に、あるいは自分で事業を立ち上げる人もいますでしょう。それぞれに希望を抱いて新しい道を歩み始めることでしょう。これから始まる新しい人生へ第一歩を踏み出すにあたって、はなむけとして、一つの言葉をみなさんに贈ります。“Think globally, act locally”です。

“Think globally, act locally”、すなわち「地球規模で考え、足元から行動せよ」ということです。グローバルな視野を持つことと、地域で活躍することは矛盾するものではない、むしろ地域を活性化させる上で、車の両輪と考えるべきです。いま課題になっている「地方創生」についても、地域の中だけで問題を解決することはできません。世界の動向を見極めて、そのなかに静岡という土地の魅力と地の利を最大限に発揮する工夫が求められています。外から静岡の地を見直すことが必要でしょう。

もともとこのことばは、地球環境問題を語る際に用いられた言葉ですが、私はその範囲をもっと拡大して解釈していいのではないかと考えています。第1の拡張は対象範囲の拡大です。皆さんがなにか考えようとするとき、あるいは仕事をしようとするときに、全体を俯瞰して、その役割を多面的に検討していただきたいということです。言い方を変えると、新人であっても、言われた仕事をただこなせばいいというのではなく、患者さん、お客さんの立場に立って考えること、また経営者の立場だったら何を求めるだろうかと考えてみてくださいということです。生意気と言われそうですが、常に仕事の全体を見渡していただきたいのです。

第2の拡張は、時間の拡張です。つまり今を考えるだけでなく、過去から未来を見通していただきたいということです。現在、世界は、歴史的な転換期にあります。日本を先頭にして、超高齢化が進み、人口も減少しはじめました。近代の経済成長を生み出してきた産業文明が成熟化し、いよいよ最終局面に差し掛かっているということです。そのなかでグローバル化への拒否反応がふつふつと沸き上がっています。

産業文明が成熟化しているということは、人口と経済の量的な拡大が困難になったということではありますが、絶望することはありません。近代化によって

物質的に豊かになり、健康長寿が実現しつつある日本を始めとする国々には、これからもっと発展しなければならない途上国や、未来の世代（みなさんの子孫です）も豊かさを享受できるような社会を建設するというチャレンジングな、大きな役割が待っているのです。それは経済の量的な拡大ではなく、むしろ生活の様々な側面の質の向上を目指すものでなくてはなりません。例えば経済協力開発機構（OECD）は、11 の指標からなる Better-life Index を国別に発表していますが、そこには GDP などの経済指標だけでなく、健康や安全、社会的なつながりなど、これまではあまり重視されなかった指標が含まれています。どのような未来を築くかは、みなさんの肩にかかっています。「持続可能な開発」の実現を目指して、みなさんには未来社会のデザイナーとして、大きな力を発揮してもらわなくてはなりません。

現在、大学のある草薙キャンパスでは、写真展が開かれています。国連広報センターが企画した「わたしが見た持続可能な開発」学生フォトコンクールの入選作品展です。本学の国際関係学部教員、学生の活動も紹介されています。これにはみなさんの同級生である国際関係学部山川侑哉くんの作品が優秀作品として展示されていますので是非ご覧ください。本学が、地域貢献を軸として、国際的な活動につなげていることを理解していただけるものと思います。

卒業されるみなさんにはもう一つお知らせがあります。本学は、1987 年 4 月に静岡薬科大学、静岡女子大学、静岡女子短期大学がひとつになって設立されたもので、今年は 30 周年の節目を迎えました。これまでに 2 万人を超える卒業生を輩出しました。

私は学生、教職員に加えて、卒業生も重要な大学の構成要素だと考えています。これまで同窓会が各学部には設置されていましたが、これを全学的な組織に拡充したいと考えました。みなさんが卒業してからも、研究、調査、仕事の面で、大学を利用していただきたいのです。あるいは同窓生同士のつながりを深めていただきたいからです。こうした思いは、同窓会の方からも提案がありました。そこで大学ホームページに、各同窓会のホームページへとリンクを張ってもらいました。また卒業生向けに、Facebook を開設しました。「静岡県立大学のティールーム」です。卒業生の結束を固めることによって、たがいに支えあっていたきたいと考えています。

40 年後、みなさんは一番若い人でも 60 歳になります。つまり未来をつくるのはみなさん自身なのです。大きな夢を持って、それを実現すべく、努力してください。大学の校章に描かれているのは、霊峰富士と、これから羽ばたこうとする

平成 28 年度 学位記授与式

若鳥です。みなさん、高い目標に向かって、力強く羽ばたいて下さい。みなさんの未来を祝福いたします。

静岡県立大学
静岡県立大学短期大学部
学長 鬼頭 宏